

## Contents

- 1 大学博物館等協議会 2016 年度大会・第 11 回博物科学会開催報告  
広島大学総合博物館 前館長 岡橋 秀典
- 3 生物多様性の危機を大学博物館から考える  
広島大学大学院生物圏科学研究科 教授 大塚 攻
- 5 静岡大学キャンパスミュージアム 2016 年度企画展「第五福竜丸と静岡大学」  
静岡大学キャンパスミュージアム 館長 塚越 哲
- 6 適塾関係資料の保存と公開  
大阪大学適塾記念センター 准教授 松永 和浩
- 8 愛媛大学ミュージアムの昆虫標本収蔵展示室  
愛媛大学ミュージアム 准教授 吉富 博之

## 大学博物館等協議会 2016 年度 大会・第 11 回博物科学会開催報告

広島大学総合博物館 前館長 岡橋 秀典

大学博物館等協議会の2016年度大会（第19回大会）及び第11回日本博物科学会が、2016年6月30日（木）・7月1日（金）に、緑陰濃い広島大学東広島キャンパスで、主会場を学士会館2階のレセプションホールに置いて開催された。参加館数



主会場の学士会館

は24館で出席者数は約150名（大学博物館関係101名、学生・一般約40名）に及んだ。

初日の午後1時から開催された大学博物館等協議会は、岡橋秀典大会実行委員会委員長、越智光夫広島大学長の歓迎の挨拶に始まった。引き続き、大塚攻広島大学教授による「生物多様性の危機を大学博物館から考える」と題する特別講演が行われた。この講演で大塚氏は、今日、恐竜時代の終焉をもたらした第5の大量絶滅に次いで第6の生物の大量絶滅が進行中であり、大学博物館はこの生物多様性の危機を社会に訴える大きな責務と可能性を有すると述べた。今後の大学博物館の活動に対する貴重な問題提起となったように思われる。



学長による歓迎の挨拶



特別講演会



博物科学会



ポスター会場



学内の遺跡見学

今大会では、なるべく多くの研究発表を可能とするため、シンポジウム形式をとらずに特別講演会だけにし、すぐ日本博物科学会に移行した。第一セッションでは開催校にも関わる「まると博物館」関連の4つの発表が行われ、山形大学をはじめとする各大学の取り組みが紹介された。

館長会議に引き続き、協議会総会と博物科学会総会が行われた。いずれも活発に議論が交わされたが、館長会議と総会の会場がやや離れていたこともあって、時間的にタイトとなったことが惜まれる。ポスターは13件、それらに各博物館の紹介ポスターも合わせて展示され、熱心に質疑と応答がなされる様子がみられた。また希望者に対して、広島大学総合博物館の本館見学も実施し、多数の参加者があった。懇親会は、主会場に近い広島大学生協食堂(北第2福利会館)で開催された。酒どころ西条の日本酒の効果もあって、なごやかな雰囲気となり、次年度開催校である山形大学附属博物館の新宮学館長からの挨拶をもってお開きとなった。大学から西条駅まで

は、東広島市から頂戴した補助金により貸し切りバスを運行した。

2日も朝9時から日本博物科学会の口頭発表が行われた。【第二セッション】では「地域と社会連携」をテーマに3件、「研究」をテーマに2件の発表が行われた。続く【第三セッション】は「展示とマネジメント」をテーマに4件、【第四セッション】は「教育・情報」をテーマに5件の報告が行われた。博物科学会全体の発表件数は18件に達し、例年通り、各大学博物館の意欲的な取り組みが紹介され、熱心に質疑が行われた。新しい取り組みやそれぞれが抱える問題点などを共有でき、参加者にとって大変有意義な大会となった。また、どのセッションにおいても学生の博物館へのアプローチが進みつつあることが報告され、大学博物館がとるべき一つの方向が示されていたように思う。午後2時ころから希望者のみを対象に、発見の小径・両生類研究施設・学内遺跡見学が実施された。キャンパス内の移動を伴うため大変であったが、多数の方に参加者いた



だった。予定通り午後4時過ぎに散会となった。

以上のように、多くの方のご参加とご協力を得て、広島大学での大学博物館等協議会及び第11回日本博物科学会は盛会裏に終了することができた。この年の梅雨は大雨警報がよく出ていたので、雨の影響を特に心配したが、そうならなかったのは幸いであった。協議会の会長校の大阪大学総合博物館の皆様には特にお世話になりました。この会議の開催は本博物館にとって大きな課題であったが、スタッフ一丸となって対処することができた。よい経験をさせていただいたことを感謝したい。

きた生物（宿主特異性の高い寄生虫など）も絶滅したはずだ。まして地味な昆虫類や顕微鏡サイズの無脊椎動物などは人知れずどれほど滅び去ったことか。第5の大量絶滅までは滅び去った生物のニッチを新たな生物が埋めるという進化プロセスが機能したが、第6はしらみつぶしのジェノサイドに過ぎぬ。何も生み出さず、荒涼とした無生物世界を創り出す。

## 生物多様性の危機を大学博物館から考える

広島大学大学院生物圏科学研究科 大塚 攻

生物多様性（生物の「個性」とそれらの「繋がり」の総体）の危機が叫ばれて久しいが、某国でいまだに拝金主義から脱却できない政治体制も生まれており、人類生存を脅かす大問題であることに変わりない。人類の生態系に与える大きな負荷によって、地史的に見て地球の時代区分はすでに完新世でなく、「人新世（Anthropocene）」に突入したと言われる。この定義は1945年の米国の核実験による放射性物質が地層上で確認でき、これまで自然界に存在しなかった人工物質による汚染、CO<sub>2</sub>の大気濃度の上昇（人為的な地球温暖化）で特徴づけられるここ70年ほどの時代である。経済活動が地球規模に及んでいることを認識するための用語でもある。今日の生物多様性の劇的な喪失は「第6の大量絶滅」と呼ばれている。もちろん、第5の大量絶滅は白亜紀末にユカタン半島に落下した隕石の衝撃による恐竜、アンモナイトなどの大量絶滅を指すことは周知の通りである。この第6の絶滅速度はかつてないほど早く、ある試算によれば1年間に約4万種もこの地球上から消滅していると言う。私は60年近く生きてきたが、日本産のトキ（2003年）、ニホンカワウソ（2012年）の絶滅宣言を明確に記憶している。絶滅したそれらの生物に依存して共進化して

人類もこの危機を打開するために様々な知恵を絞り、政策を出して、生物多様性の危機になんとかブレーキをかけようと尽力してきた。生態系サービス、エコロジカル・フットプリント、プラネタリー・バウンダリー、などによって生物多様性の価値を金銭に換算してだれもが理解しやすいように工夫し、人間の経済活動を数値化して環境破壊、天然資源浪費に警鐘を鳴らしてきた。古くはワシントン条約、そしてラムサール条約、生物多様性条約などもブレーキ役として機能している面はある。また、生物が進化の長い時間をかけて獲得した驚嘆すべき能力を人間社会に取り入れようというバイオミクリー（バイオミメティクス）という、生物多様性保全を前提にした古くて新しい学問が注目されている。この胎動が西洋社会から自発的に出て来たことも見逃せない。江戸時代までの日本人の自然と共存し（SATOYAMAなど）、リサイクルの行き届いた生き方（MOTTAINAI）も今、国際的に再評価されている。マスコミでも盛んに取り上げられており、こ

ちらの浸透度は高まって来ている。人々の意識に生物多様性のことが日常的に根付かないとこの危機は打開できない。

さて、大学博物館である。少なくとも私が尋ねた日本のいくつかの大学博物館では生物多様性を主要テーマの一つとして取り上げていた。しかし、各大学の目玉となる研究成果を、sense of wonderを刺激する形での展示例がほとんどであり、ともすれば暗いイメージになってしまう生物多様性の危機の展示を前面に打ち出した博物館は多くはない。「博物館は楽しい」という先入観があり、退館する際に暗澹たる気持ちになればリピーターは望めない。しかし、ちょっとした工夫によってはスムーズな導入は可能であろう。例えば、生物の第1～第6の大量絶滅の原因と結果を比較してみる試みはどうであろう。食物連鎖あるいは食物網の模式図をよく見かけるが、これに必ずヒトを入れることである。その1つの工夫だけで汚染物質の生物濃縮が理解できるようになる。汚染物質はやがて我々に辿り着くのだ。大学博物館のある地域の環境問題を積極的に取り上げてみてはいかがであろう。広島大学総合博物館であれば瀬戸内海をテーマにすると入館者の興味もわくであろう。自分の問題として意識ができるからである。海砂採取によるイカナゴ（図A）の激減とスナメリ（竹原市沖）、アビ類（主にシロエリオオハム、斎灘周辺）の衰退、ヒガシナメクジウオ（図B）（三原市沖）の激減（いずれも地域指定の国の天然記念物）との関連性を理解する。干潟、藻場の消滅とカブトガニ（図C）の衰退の関係なども広島ならではのテーマであろう。カブト

ガニは生きた化石としてだれでも知っている有名な動物であり、大型であるため節足動物の形態、相同を学ぶためにはよい材料である。また、地質学、系統進化学、免疫学、環境学、海洋生態学などを学ぶチャンスを与えてくれる。親しみを持った動物を窓口知識は無限大に広がっていく。地球温暖化によって海藻類、甲殻類などの熱帯性種の北上や優占も瀬戸内海で現実に行っている問題なのだ。地球環境の激変をわかりやすく解説し、一般市民にも身近でありながら深刻な問題であることを広く浸透させる役割が大学博物館にはある。



【図A】瀬戸内海中央部で採集されたイカナゴ 体長約8cm



【図B】瀬戸内海中央部で採集されたヒガシナメクジウオ  
単にナメクジウオと呼ぶこともある  
イカナゴと一緒に採集された 体長約5cm



【図C】広島県で発見されたカブトガニ成体雌雄のつがい  
左がメス、右がオス 体長は50cmを超える

静岡大学キャンパスミュージアム  
2016 年度企画展  
「第五福竜丸と静岡大学」

静岡大学キャンパスミュージアム  
館長 塚越 哲

2016年度静岡大学キャンパスミュージアム企画展は、「第五福竜丸と静岡大学」と題して行われ（図1）、平成28年11月14日（月）から同25日（金）までの12日間開催され、636名の入場者があった。

1954年3月1日、ビキニ環礁におけるアメリカ合衆国の水爆実験によってマグロ延縄漁船・第五福竜丸とその乗組員が被ばくした、いわゆる「第五福竜丸事件」と本学のかかわりについて展示し、この事件の社会的・歴史的意味を原点に立ち戻って見つめなおすことを目的とした企画である。

本学が「第五福竜丸事件」に深くかかわっていたことは、現在ほとんど知られていない。本学の塩川教授（当時）をはじめとする放射線の研究チームが、被ばくした第五福竜丸の船体から回収した試料（写真2下）、現在は都立第五福竜丸展示館に移管されている死の灰（写真2右上）、調査に用いられた放射線計測器（写真2左上）を中心として展示を構成した（写真2）。

当時を語るこれらの貴重な実物を展示ケースに収めるとともに、主展示室となった実習室をボードで囲み、ここに都立第五福竜丸展示館から貸与された解説パネルを吊るして事件の全体像をつかめるようにした。また、本ミュージアムに所蔵されている船体の塗料、サメのひれ、ボンデン（シュロ製の漁具）、ドラム缶の錆については、本学理学部附属放射科学研究施設（本年2月より放射科学教育研究推進センター）がもつ最新の分析機器によって再分析され、今なお残る各種放射線の検出データとともに紹介した。また、事件当時塩川教授が分析に使用し、日本でほとんど所有する人がいなかった微量元素の分析方法を解説した米国の専門書も併せて展示した。他には本学大学文書資料室に収められていた、



【図1】企画展「第五福竜丸と静岡大学」のポスターとチラシのデザイン



【写真2】展示された死の灰（右上）、測定器（左上）、船上回収物（下）

事件当時静大生が原水爆反対の仮装デモを行う様子が写った写真パネルや、学生が自主刊行していた「静岡大学新聞」が取り上げた事件に関する記事なども展示した。これらの資料は、都立第五福竜丸展示館も把握しておらず、事件に関連する新資料として注目された。さらに静大祭の開催に合わせ、11月20日（日）には都立第五福竜丸展示館事務局長の安田和也氏を招いて「第五福竜丸事件」に関する講演会\*が行われた（写真3）。



企画の内容から、地元TV、新聞による報道もあり、地元市民へ一定のアピールもできたと思われる。来場者が記入したアンケート（79件回収）も概ね好評で、企画内容に賛同する声を多数見ることができた。一方で社会的にアピール力のある展示であったにもかかわらず、学生の来場者が少ないという印象をもった。若い世代に対してこのような企画がどうしても訴求力をもつことができるのか、大学博物館であるキャンパスミュージアムがもつ学生への発信力について課題が残ったともいえる。特に大学祭開催期間に合わせて行われた講演会には、学生らしい参加者の姿を見ることができなかった。アンケートの中におそらく留学生が書いたであろう「このような展示がキャンパス内でなされたことに感銘を受けた。しかしこのような重要な展示を見に訪れる学生があまりにも少ないのはなぜか」と言った内容の英語の文章は実に印象的であった。

本企画展は、学外では都立第五福竜丸展示



【写真3】 静大祭開催日の11月20日に行われた都立第五福竜丸展示館・安田和也氏による講演会

館、焼津市歴史民俗資料館、学内では放射科学研究施設、大学文書資料室、技術部スタッフの支援を受けた。今後とも、本ミュージアムは学内外の組織と連携して活動に取り組んでゆきたいと考えている。

※本講演会の全内容は、静大TV

([http://sutv.shizuoka.ac.jp/video/?id=YW97S3VVVdI&playlistname=イベント\\_静大祭2016](http://sutv.shizuoka.ac.jp/video/?id=YW97S3VVVdI&playlistname=イベント_静大祭2016)) で常時放映されている。

## 適塾関係資料の保存と公開

大阪大学適塾記念センター  
准教授 松永 和浩

昭和を代表する歴史小説家・司馬遼太郎の言を借りれば、大阪大学は校祖を有する特異な国立大学であるという。すなわち1838年（天保9）、大坂に蘭学塾である適塾を開いた蘭方医・緒方洪庵を指している。洪庵の薫陶を受けた弟子たちが大阪ひいては日本の近代医学を支え、大阪医学校・大阪医科大学から1931年（昭和6）創設の大阪帝国大学（現・大阪大学）医学部に至る系譜に連なっているのである。

かつて適塾が存在した建物も北浜（大阪市中央区）に現存唯一の蘭学塾として残存し、1942年（昭和17）に緒方家から国に寄贈されてからは大阪大学が管理している。この建物は1940年に

大阪府史跡、翌年に国史跡、1964年に国の重要文化財に指定された。

如上的ような関係から、大阪大学および同大総長が会長を務める適塾記念会（1952年設立）は緒方洪庵・適塾とその門下生に関する歴史資料を蒐集してきた。2011年には大阪大学適塾記念センターが発足し、それまで阪大および適塾記念会が蒐集してきた資料を継承した。当センターが2016年に大学博物館等協議会に加盟したことを機に、この場を借りてセンターが所蔵・管理する適塾関係資料の概要を紹介したい。

適塾関係資料の全貌を初めて公開した『大阪大学適塾記念センター所蔵 適塾関係資料目録』（大阪大学出版会、2015年）によると、2014年3月時点で日本語資料4332件・洋書資料160件を数え、その後を受贈・購入した資料が順次追加されている。内容から①洪庵の医療・研究関係、

②適塾での教育関係、③その他に大別される。

まず①洪庵の医療・研究に関して、日本初の病理学書となった『病学通論』(1849)や当時最新の臨床医学書を翻訳した『扶氏経験遺訓』(1857-61)等の著作物、「年中日次記」(1853)・「勤仕向日記」(1862)といった洪庵自筆の日記がある。また洪庵が往診に使用した薬箱が2点あり、内容物からは東洋医学から西洋医学への過渡的状况を窺い知ることができる。洪庵は前近代において脅威であった感染症の対策にも積極的で、1858年(安政5)にコレラが流行した際に緊急出版した『虎狼痢治準』や、西日本における天然痘(戦国大名の伊達政宗が右目を失った病氣)予防の種痘(ワクチン接種)事業の拠点となった除痘館での活動をまとめた「除痘館記録」といった、洪庵の手になるものも残る。ベルリン大学の医師フーフェラントが医者倫理観を示した「医者之義務」を洪庵が12箇条に抄訳した「扶氏医戒之略」は近代日本の医師たちに影響を与えたが、洪庵嫡系に伝来した推敲跡が残る自筆本の寄贈を2015年度に受けた。

②教育関係については、まずオランダ語学習に用いられた文法書『和蘭文典前編』『和蘭文典後編』(通称「ガランマチカ」「セインタキス」)および蘭和辞書「ゾーフ・ハルマ」があり、当時の教育内容を窺い知ることができる。1859年の「適塾塾生等級別名簿」には塾頭・塾監・第一等級以下に塾生が分けられ、福沢諭吉『福翁自伝』や長與専斎『松香私志』といった門下生の回想録に記される実力主義の塾風を当時代史料として証明する。また退塾後の弟子と洪庵との間で

交わされた書状も多く残り、教育・研究に止まらない幅広い交流が窺える。洪庵の江戸赴任後、適塾は養子の拙斎や嗣子の惟準によって1886年頃まで運営されており、それを示す明治年間の塾生名簿2冊が最近寄贈された。

③のその他としては、洪庵が詠んだ和歌が「緒方洪庵和歌貼交屏風」や「詠草」として残る。洪庵の肖像も、40歳・50歳当時の姿を描いた掛け軸や、没後に洋画家・五姓田義松が描いた油絵が存在する。また洪庵が師事した大坂の蘭学者・中天游が描いた「大黒天像」、18世紀末から蘭学者の間で流行した医学の祖・ヒポクラテス礼賛を示す石川大浪画「西洋医祖必父像」および坪井信道「医祖賛」、福沢諭吉・佐野常民・大鳥圭介といった門下生による詩画軸がある。

以上、適塾関係資料を概観したが、その特色は次ように整理される。第一に蘭学・蘭医学関係資料として、あるいは洪庵とその門下生の関係資料として貴重である。第二に日本語資料(古文書・記録・和本等)、洋書、書画、道具類(薬箱等)と形態が多彩である。第三に現存唯一の蘭学塾遺構と一体的に保存されている。その内容は歴史学・オランダ学・教育学・医学・薬学・建築史と多岐に渡り、各分野からの多角的分析が可能な研究素材といえよう。適塾関係資料を活用して学際研究を進めていくことが課題であり、当センターがその拠点となるべきことは論を俟たない。現在、当センターでは「大阪大学適塾記念センター所蔵 適塾関係資料画像データベース」と題したデジタル・アーカイブの構築に取り組んでおり、これを適塾・蘭学研究の一大プラットフォームとして機能させたいと考える。



適塾(大阪市中央区北浜)



適塾関係資料

## 愛媛大学ミュージアムの 昆虫標本収蔵展示室

愛媛大学ミュージアム 吉富 博之

### コレクション概要

愛媛大学ミュージアムの昆虫コレクション（EUMJ）は、日本の大学博物館では3番目の規模と言われ約120万点（約1,400点のタイプ標本を含む）を保有している。昆虫標本収蔵展示室は、ミュージアムの常設展示の途中にあり、一般開放していないが扉から中を覗くことができる。本来はバックヤードと考えられがちな収蔵室と、ここで行われるキュレーション作業が展示の一部となっている。

このコレクションは元来、愛媛大学農学部環境昆虫学研究室の教員と学生が収集・保管してきた研究資料であり、現在も収集や保管・管理は同研究室員が行っている。昆虫標本は展示にも使用され、毎年夏に開催している昆虫展（詳しくは愛媛大学環境報告書2016を参照）や小学校等への出前展示などでは、子供たちに人気である。今回は研究活動の面から、このコレクションを紹介したい。

### 学術研究

昆虫標本は学術資料であるとの位置付けから、研究に積極的に利用されることこそ重要、との考えに基づき、農学部環境昆虫学研究室の教員・学生による分類学などの研究に利用されているほか、学外の研究者にも利用されている。大学等の機関に属する研究者だけでなく、在野の研究者であっても研究を目的とした場合は利用を認めている。標本の貸出件数は、年間20件程度である（表1）。

学外から本館を研究のために訪れるゲスト研究者は、とても歓迎される存在である（図1）。学内の研究者（教員・学生）だけでは標本資料の整理等が行き届かない状態であり、ゲスト研究者が調査・研究の際に自身の研究対象の標本を探し出し集めることが資料整理につながる。また、作業中に、思わぬものが発見されることもある。新種は、フィールドで発見されるものと思われがちだが、フィールドで採集された後に膨大な博物館資料の中から発見されることが多い。

【表1】 昆虫標本の貸出件数と主な貸出先

年 度	貸出件数	標本数	主 な 貸 出 先	
			国 内	国 外
2009*	20	1016	福井大学、北海道大学総合博物館、面河山岳博物館、ホシザキグリーン財団、首都大学東京など11件	ウィーン自然史博物館、チェコ国立博物館、フンボルト大学など9件
2010	34	5359	九州大学総合研究博物館、北海道大学、横浜植物防疫所、首都大学東京、面河山岳博物館など24件	スイスバーゼル博物館、チェコ国立博物館、ソウル国立大学など10件
2011	22	2227	東京大学、名古屋市衛生研究所、面河山岳博物館、九州大学、鹿児島大学など15件	スイスバーゼル博物館、エアフルト市立博物館、台湾農業試験場など7件
2012	19	793	九州大学総合研究博物館、北海道大学、大阪府立大学、徳島県立博物館など10件	ベルギー国立研究所、ヴロツワフ大学（ポーランド）、スミソニアン自然史博物館、CSIROなど9件
2013	17	1034	九州大学、高知大学など9件	韓国国立大学、CSIRO、オーストラリア自然史博物館、台湾農業試験場、ウィーン自然史博物館など8件
2014	21	2304	九州大学、東京農業大学、国立科学博物館、東京大学、農業環境技術研究所など13件	韓国国立大学、ヴロツワフ大学、チュンナム大学、台湾農業試験場、ウィーン自然史博物館など8件
2015	12	2232	九州大学、国立科学博物館、農業環境技術研究所など8件	フロリダ州立無脊椎動物コレクション、ヴロツワフ大学、台湾農業試験場など4件
2016	11	841	北海道大学、神戸大学、首都大学東京など7件	ウィーン自然史博物館、台湾農業試験場など4件

\*：ミュージアム開館前の実績も含む





【図1】 標本収蔵展示室で調査する海外からのゲスト研究者



【図2】 Facebookを用いた研究成果の公開

### 資料保存

分類群毎に市販の標本箱（大型ドイツ箱）と特注のユニットボックス（大中小の3サイズ）を用いて管理・保存している。一般の標本は管理番号等を付けず台帳化していない。このことにより、海外の博物館などと余剰や重複する標本を交換・譲渡する際にはスムーズに行うことができる。標本の整理は、毎週曜日を決めて環境昆虫学研究室の教員と学生が行っているが、未整理標本も多い。しかし他館よりも整理され研究活動に使用しやすい状態であると自負している。

タイプ標本（総模式標本）に関しては、写真と共にデータベースを作成しているが、その情報の公開が今後の課題である。近年増えている分子解析用の標本（エタノール液浸・冷凍標本）についての管理をどのように行うかも悩ましい問題である。また、どの機関でも同様だと思うが、収納スペースの確保が近い将来の大きな問題になると考えられる。

### 研究活動等の広報

2016年からは当館公式のSNS（facebook）を用いて研究活動や成果を積極的に情報発信している（図2）。学内の研究者はもちろんのこと、学外の研究者によって行われた研究成果であっても、当コレクションを用いて行われた研究成果は、そのコレクションを語るうえで重要だと考える。全てを網羅することは困難であるが、これからも続けていきたい。加えて、ゲスト研究者の訪問などの収蔵展示室の利用状況についても情報発信している。

標本室は、どうしても資料保管庫というイメージになりがちだが、当館の昆虫標本収蔵展示室は、単なる標本の収蔵庫という「静的」なものではなく、研究の場である「動的」な場所であることをアピールしたいと考える。2017年度前期には、昆虫標本収蔵展示室での研究活動を紹介した「新種発見のための7つのカギ—昆虫分類学の世界—」という特別展を開催する。

大学博物館等協議会加盟館の活動状況

東京藝術大学大学美術館

特別展「雪村—奇想の誕生—」

2017年3月28日(火)～5月21日(日)

東京藝術大学大学美術館本館

2074、夢の世界

2017年6月17日(土)～6月25日(日)

東京藝術大学大学美術館本館

東京藝術大学創立130周年記念特別展

藝「大」コレクション パンドラの箱が開いた!

【第1期】2017年7月11日(火)～8月6日(日)

【第2期】2017年8月11日(金)～9月10日(日)

東京藝術大学大学美術館本館

たほりつこ退任記念展「小さな光の森」

2017年10月5日(木)～10月19日(木)

東京藝術大学大学美術館本館

東京藝術大学創立130周年記念特別展

「日本近代洋画の醸成と発展」(仮称)

2017年10月6日(金)～2018年1月7日(日)

国立台北教育大学北師美術館

東京藝術大学創立130周年記念特別展

「大正・昭和初期の

東京美術学校の作品を中心に」(仮称)

2017年10月28日(土)～11月26日(日)

東京藝術大学大学美術館本館

菅野健一退任記念展

「Conditor alme siderum ≡ Deus absconditus」

2017年11月3日(金)～11月12日(日)

東京藝術大学大学美術館本館

美術学部木戸修教授退任展(仮称)

2017年11月16日(木)～12月3日(日)

東京藝術大学大学美術館陳列館

東京藝術大学大学院美術研究科博士審査展

2017年12月12日(火)～12月21日(木)

東京藝術大学大学美術館本館

大学院美術研究科宮廻正明教授退任展(仮称)

2018年1月4日(木)～1月17日(水)

東京藝術大学大学美術館本館

梅原幸雄退任展

2018年1月6日(土)～1月18日(木)

東京藝術大学大学美術館陳列館

東京藝術大学卒業・修了作品展

2018年1月28日(日)～2月3日(土)

東京藝術大学大学美術館本館、

東京藝術大学構内、東京都美術館

※事情により展覧会名称、会期等が変更になる場合があります。



東京藝術大学大学美術館



名古屋大学博物館



## 名古屋大学博物館

すべて名古屋大学博物館にて開催

### 特別展

「球状コンクリーションの謎  
ー化石永久保存のメカニズム」  
2017年3月14日(火)～7月8日(土)

### 企画展

「みる・はかる  
ー大正・昭和時代の計測・観測機器」  
2017年11月7日(火)～2018年1月20日(土)

### 企画展「虫の世界」

2017年7月25日(火)～10月21日(土)

### 企画展「ボタニカルアート作品展」

2018年1月30日(火)～3月17日(土)

## 大阪大学総合学術博物館

### 第21回企画展

「HANDAI ロボットの世界  
ー形・動きからコミュニケーション  
そしてココロの創生へー」  
2017年4月26日(水)～8月5日(土)  
大阪大学総合学術博物館待兼山修学館

### 第10回特別展

「関西のモダン・シアター（仮称）」  
2017年10月23日(月)～12月22日(金)  
大阪大学総合学術博物館待兼山修学館

## 大阪大学適塾記念センター

### 特別展示

「新発見！緒方洪庵夫人・八重のてがみ ー“良妻賢母”の知られざる素顔ー」  
2017年5月30日(火)～6月11日(日)  
適塾（大阪市中央区北浜3-3-8）

## 愛媛大学ミュージアム

すべて愛媛大学ミュージアムにて開催

### 第2常設展示1

「米山 多様な美の形展」  
2017年4月12日(水)～7月31日(月)

### 企画展

「地質情報展2017えひめ」  
2017年9月16日(土)～18日(月)

### 特別展

「昆虫分類学の世界展  
ー新種発見のための7つのカギー」  
2017年5月17日(水)～7月31日(月)

### 企画展

「状況2017 展（美術作品展）」  
2017年11月24日(金)～12月10日(日)

### 第2常設展示2

「弘法大師展」  
2017年8月2日(水)～12月25日(月)

### 第2常設展示3

「河東碧梧桐展  
ー漢代・六朝書の影響（仮称）ー」  
2018年1月10日(水)～3月26日(月)

### 特別展

「昆虫展&水生生物展2017」  
2017年8月5日(土)～8月10日(木)

### 企画展

「第58回全国大学・高専卒業設計展示会」  
2018年2月28日(水)～3月12日(月)

MUSEO ACADEMIAE 第19号  
大学博物館等協議会ニューズレター

発行日 2017年6月23日  
発行者 大学博物館等協議会  
編集 大阪大学総合学術博物館 06-6850-6714  
560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-13